

オーディション 台本

お話は、狸や山の動物たちと人間のおとぎ話です。見た目も着ぐるみにメイクをしているのが動物で、それ以外が人間、すべてが、寓話、ファンタジーの世界です。でも、会話は現実的、リアルな庶民の会話です。年寄りから子供まで、たくさんのキャラクターが出てくる群像劇です。

基本の脚本はありますが、多くの出演者を募集して、登場人物を再構成して、脚本を修正していきます。

以下に、登場人物と場面、大まかな設定で、4パターンテキスト台本を作りました、ご自分で合いそうな役を選んで、演じてみてください。年齢想定はぜんぜん気にしなくていいです。若い人でも年寄りでも、もちろん、これ以外の登場人物もいますから、ご自由にアピールしていただければと思います。

ぼん子とうさぎは、狸と兎が人間に化けてる女の子です。年齢は十代後半から二十代。二人は子狸たちと遊んで、お家へ帰るところです。

ぼん子とうさぎ、  
山道をおしゃべりしながら登ってくる。

うさぎ「ぼん子ちゃん、イエーとかヤーとか言ってるちゃダメなのよ」

ぼん子「駄目なの？」

うさぎ「世間の馬鹿と一緒にしちゃダメ、ヒップホップは誇張以外の何物でもないのよ、カメラが止まってからあんながに股で歩いてる奴なんていないのよ」

ぼん子「そうなの？」

うさぎ「そうなの、ラッパがやってる悪いことは、暴力と違法行為の作り話を吹きまわってることだけよ」

ぼん子「そうなんだ」

うさぎ「でもこれがショービジネスで、ビクマネーを生んでるわけよ、お馬鹿な有象無象がうじゃうじゃわいてきて、お小遣いをじゃぶじゃぶ使っちゃってるおかげでね」

ぼん子「私はスターになってセレブになりたいけど」

うさぎ「私たちはなれるわよ、世の中馬鹿ばかりなんだから」

ぼん子「でしょ、日本の選挙みたいなもんでしょ」

うさぎ「あんた、わってるじゃない」

ぼん子「でしょ、わかってるのよ私って」

× × ×

うさぎ 「ピョンピョンとかポンポンとか、タテノリはやめよー」

ほん子 「だよー」

うさぎ 「私たちはオフビートのグループを出すのよ」

ほん子 「だせるの？ ヨコノリ？」

うさぎ 「ルーツミュージックよ、本物のリズムアンドブルースよ、ソウルよ」

ほん子 「そうなの？」

うさぎ 「そうなのソウルなの、なのよ、民謡よ、エンヤトットよ」

ほん子 「よくわかんないんだけど」

うさぎ 「私だってよくわかんないのよ」

ほん子 「わかんないのがいいんだ」

うさぎ 「そう、わかんないのがいいのよ」

ほん子 「でしょー、わかんないのがいいのよ、イエー！」

うさぎ 「だからーイエーじゃないの！」

## センセと白木

センセこと荒井熊五郎は石巻医院の院長。  
 年齢60後半から七〇前半、実は獣医師免許しか持  
 っていない偽医者、石巻山の住人たちの親分。  
 白木恒雄は架空の神社、針扇神社の宮司、  
 年齢四〇代中ごろ。石巻山の利権で対立している。  
 石巻山の中腹の広場。宮司の白木が歩き回っている。  
 腰を痛めたセンセが杖をついてやってくる。

センセ「おい、白木、何してるんだ」

白木「見回りですよ、祭りの準備の」

センセ「いいよ、お前は余分なことしないで」

白木「そうはいきませんよ、私は宮司なんですから」

センセ「何が宮司だよ偉そうに、言われています野郎のくせに」

白木「何言ってるんですか」

センセ「お前は、なんでもかんでも、…と言われています、じゃな

いか、石巻様の大国主の命が、表浜で拾ってきた大きな  
 ホタテ貝の姿をかたどったと言われています、いったい誰  
 が言っただよ

白木「…うちの親父が言ったものと言われています」

センセ「ばーか、言われています野郎」

白木「失礼ですよ、本当のことだと、言われていますから」

センセ「そうだったの、へー、あの悪徳温泉組合長が言われちゃ  
 ったの、私も豊橋一の名医と言われています、か」

白木「それは絶対言われてません」

センセ「はい、…お前はインチキといわれているがね」

白木「センセの腰がもつと悪くなるように祈願しときますよ」

センセ「お前にセンセと呼ばれるすじあいはないね」

白木「私もそう言われているからしょうがなくて言ってるだけで  
 すよ」

センセ「言われたくないよ」

白木「言いたくないですよ」

センセ「めんどくさいなー、どっちでもいいよ」

伯美真は石巻医院の婦長、五〇代

花咲小梅は唯一の旅館、春日旅館の仲居、四〇代

春日旅館ロビー。

仕事をサボって、伯がお茶飲んでいる。

小梅は吹き掃除しながら唄ってる。

小梅 「♪たんたん狸の金時計、風もないのにぶーらぶら♪」

伯 「止めなさいよ、金玉なんて」

小梅 「唄ってないじゃん」

伯 「じゃあ、唄いなさいよ、ちゃんと」

小梅 「やだよ、はしたない」

伯 「何言ってるのよいい年して、やから中のやからだったくせに」

小梅 「♪ありのままの姿見せるのよ ありのままの自分になるの 何も怖くない風よ吹け 少しもさむくないわ♪」

伯 「さむいよ」

小梅 「遊んでないで、仕事しなさいよ」

伯 「いいのよ、暇なんだもん、患者なんてきやしないんだから」

小梅 「センセの相手してあげなさいよ、寂しいんだから」

伯 「あのおじさんは、もう酔っぱらって昼寝してるよ」

小梅 「どおゆう病院」

伯 「ああゆう病院」

小梅 「伯さんも病人作り出すぐらいの努力しないと」

伯 「毒でも飲ませるかね」

小梅 「そうよ、病人は作り出す時代よ」

伯 「でも、ここいらの馬鹿は丈夫にできてるのよね」

二人 「困ったもんだよね」

古狸こと、古川太一朗は古川総業会長で、元やくざの実業家。年齢60代半ば  
 今野銀二は古川の秘書、年齢30代半ば  
 古狸一味は、石巻山の乗っ取りを企てている。  
 着ぐるみの熊を使って石巻山に騒動を起こそうとして、失敗していた。

古川総業・社長室。

テーブルに広げられた地元紙、〈熊を仕留めたと思ったら、なんと熊の着ぐるみ！みんな怪我なくてよかったね〉てな感じの記事。古狸、新聞を握りつぶして投げつける。土下座している銀二。

銀二「すいません」

古狸「だいたい中国のインチキサイトで買うからこんなことになるんだよ」

なるんだよ」

銀二「否、会長、中国製はかなり良かったですよ、ヒグマでした、俺はグリズリー注文したんですが」

古狸「馬鹿野郎！いや、じゃねえよ、生意気に、いや、じゃなくて矢が飛んできたんだろ、弓矢が」

銀二「すいません、はい、弓矢で殺されそうになりました」

古狸「いっぺん殺されて来いよ、お前は、熊に生まれ変わってくれればよかったのに」

銀二「はい、自分だったらツキノワグマですかね」

古狸「もういいから、本物呼べ、北海道から二、三頭来てもらえ、犯罪歴のある本物の害獣を」

銀二「はい！大至急、…あのー、連絡先は？」

古狸「吉本興行のマネージメントで…、馬鹿野郎、お前と遊んでる場合じゃないんだよ、俺が行く、俺が石巻山へ乗り込んでやる」

銀二「はい、ですよ、熊は飛行機乗れない…」

古狸「車！」